

# ポー・カレン語の対句法 (parallelism) \*

加藤昌彦  
(大阪外国語大学)

## Parallelism in Pwo Karen

Atsuhiko KATO  
Osaka University of Foreign Studies

‘Parallelism’ is used frequently in Pwo Karen as in other mainland Southeast Asian languages. The purpose of this article is to linguistically describe the parallelism of Pwo Karen. In Pwo Karen we can often find words whose meanings have been diluted and can be used only in parallel expressions. Typologically this phenomenon can be taken as an extreme of “analysis.”

**Keywords:** *Karen, Pwo Karen, Tibeto-Burman, Sino-Tibetan, parallelism*  
キーワード: カレン、ポー・カレン、チベット・ビルマ、漢蔵語族、対句法

- 1 はじめに
- 2 様々な例
- 3 動詞を含む要素の並列について
- 4 単独では使われない形態素を含む対句表現
- 5 対応する二音節語との関係について
- 6 対句表現の拡張
- 7 ポー・カレン語の類型的特徴と対句法 —結びにかえて—

### 1 はじめに

ポー・カレン語<sup>1</sup>には、類似する二つの要素を、要素間の関係を表す標識を用いずに並列するという現象が見られる。これを本稿では対句法 (parallelism)<sup>2</sup> と呼び、対句法によって

\*本稿は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究会「文法記述の方法の研究」において2004年2月7日および12月12日に発表した内容に基づいている。貴重なコメントをいただいた中山俊秀、塩原朝子、阿部優子、江畑冬生、蝦名大助、笹原健、笹間史子、月田尚美の各氏に感謝の意を表したい。

<sup>1</sup>ポー・カレン語 (Pwo Karen) はビルマ (ミャンマー) およびタイで話されるシナ・チベット語族チベット・ビルマ語派カレン語群 (Karenic) の一言語である。SOV型の言語が大部分を占めるチベット・ビルマ諸語にあって、カレン語群はSVO型の語順を持つという点で特異である。ポー・カレン語は同じくビルマやタイで話されるスゴー・カレン語 (Sgaw Karen) に系統的に近く、ビルマ語で *käyìn zǎgá* (カレン語) と言うとこの二つの言語を指すことが多い。本稿で論じるポー・カレン語は、カレン州 (Karen State) の州都パアン (Hpa-an) を中心とする地域で話される方言である。なお、各例文の日本語訳の後に付した番号は筆者の資料の整理番号である。資料のリストは加藤 (未公開) に掲載してある。

<sup>2</sup>加藤 (未公開) ではこの現象を「類似要素反復」と呼んでいる。なお本稿は加藤 (未公開) の第29章を書き改めたものである。

作られた個々の表現を対句表現 (parallel expression) と呼ぶ。同様の現象は Matisoff (1973: 81) が言うように東南アジア諸言語に広く観察される。例えば、Haas (1964: xvii-xviii) がタイ語について elaborate expression という用語で、Nguyen-Dinh-Hoa (1965) がベトナム語について parallel construction という用語で、Matisoff (1973: 特に 81-86, 297-301) がラフ語 (Lahu) について elaborate expression という用語で、それぞれ言及しているのはポー・カレン語の対句法と同様の現象である。また坂本恭章 (1988: 1489) が「随伴語」と呼んでいる単語群も、クメール語の同様の表現の中に現れる形式であると考えてよい。他のカレン系言語を見てみると、Henderson (1997 vol.II: xiv-xv) がボエー・カレン語 (Bwe Karen) について elaborate expression という用語で、および、Solnit (1997: 271-287) がカヤー語 (Kayah) について elaborate expression および parallelism という用語を用いて、それぞれ言及している。

ポー・カレン語の対句表現の例を挙げよう。

- (1) nī phú nī mâ  
 得る 子 得る 妻  
 「妻子を持つ」(001.2671)

この例では二つの要素 nī phú と nī mâ が並べられている。どちらも「動詞 + 目的語」であるという点で同一の統語的特徴を持つ。全体の意味は各要素の意味を足し合わせた意味になる。

以下にポー・カレン語の対句法の一般的な特徴を列挙する。

- 二つの要素の統語的性質は一致しており、全体としての統語的性質も各要素の統語的性質を引き継ぐ。
- 二つの要素は意味的に何らかの共通性を有している。
- 二つの要素の順番は、基本的には自由である。
- 二つの要素は、どちらも2音節以上を含み、かつ、同じ音節数から成る。ただし、それぞれの要素が非常に長い場合に限り、音節数が多少異なることもある。
- 二つの要素にはしばしば同一の形態素が含まれる。
- 対句法はしばしば表現の文体的価値を高める働きをする。したがって、くだけた会話で対句法が使われることは相対的に少なく、逆に、かしこまった場面における発話ではより頻繁に使われる。

## 2 様々な例

以下に対句法が用いられた例を、並べられた要素の種類別に挙げる。各要素を  $\square$  で囲んで示す。なお、並べられる要素の種類はこれ以外にも存在する可能性が十分にある。

## 2.1 名詞句の並列

### 2.1.1 単独の名詞から成る名詞句

- (2) C thóphúC C líphúC  
小鳥 リス  
「小鳥とリス」(II-11.13)

- (3) C chəkhūC C chəkhléinC  
暑さ 寒さ  
「暑さと寒さ」(001.496)

通常、名詞を列挙する場合には名詞修飾助詞の *dè* などを用いる。

- (4) thóphú *dè* líphú  
小鳥 と リス  
「小鳥とリス」

しかし次のように時として助詞を介在させない列挙も使われることがあり、このような例と対句表現の区別は難しい。

- (5) thóphú, líphú  
小鳥 リス  
「小鳥とリス」

### 2.1.2 「代名詞 + 名詞」から成る名詞句

- (6) C ?ə- cúC C ?ə- khánC  
3sg 手 3sg 足  
「彼の手と足」(II-11.6)

- (7) C ?ə- cìC C ?ə- thônC  
3sg 銀 3sg 金  
「彼の金と銀」(II-14.8)

- (8) C ?ə- mōC C ?ə- phāC  
3sg 母 3sg 父  
「彼の母と父」(IV-01.11)

- (9) C jə- phúC C jə- lìC  
1sg 子 1sg 孫  
「私の子と孫」(015.26)

## 2.2 動詞句の並列

### 2.2.1 単独の動詞から成る動詞句

- (10) ㄘ pàdóㄟ ㄘ jàujánㄟ  
尊敬する 尊敬する  
「尊敬している」(017.11)
- (11) ㄘ ?ékwiㄟ ㄘ ?échânㄟ  
愛する 愛する  
「愛する」(017.19)
- (12) ㄘ nânmâNㄟ ㄘ nâncàㄟ  
香る 香る  
「香る」(I-02.7)
- (13) ㄘ lòthàinㄟ ㄘ kànkàㄟ  
喋る 噂する  
「お喋りする」(II-02.14)
- (14) ㄘ pàkàㄟ ㄘ θàméㄟ  
気にとめる 恐れる  
「気にする」(III-03.10)
- (15) ㄘ báciㄟ ㄘ bá?àㄟ  
くしゃみする 鼻がつまる  
「くしゃみしたり鼻がつまったりする (=風邪をひく)」(001.642)
- (16) ㄘ dócāㄟ ㄘ thánthôㄟ  
豊かな 向上した  
「発展している」(001.1211)

### 2.2.2 「動詞 + 目的語」からなる動詞句

- (17) ㄘ mà cháíㄟ ㄘ mà klòㄟ  
作る 田 作る 沖積地の農地  
「稲作を営む」(I-10.19)
- (18) ㄘ θàv nìㄟ ㄘ θàv nàㄟ  
動かす 日 動かす 夜  
「延期する」(001.484)

### 2.2.3 「動詞 + 斜格補語」から成る動詞句

- (19) ㄘ ʔótháo lú ʔòㄟ ㄘ ʔótháo lé jòㄟ  
止まる (場) あそこ 止まる (場) ここ  
「(バスが) あちらこちらに止まる」(001.246)

### 2.2.4 「動詞助詞 (前置されるもの) + 動詞」から成る動詞句

- (20) ㄘ bá klìcìㄟ ㄘ bá ʔángxúㄟ  
(当為) 努力する (当為) 探す  
「努力したり (知識を) 探求したりしなければならない」(I-05.21)

- (21) ㄘ dào ʔánㄟ ㄘ dào ʔòㄟ  
(使役) 食べる (使役) 飲む  
「ご馳走する」(001.1246)

### 2.2.5 「動詞 + 動詞助詞 (後置されるもの)」から成る動詞句

- (22) ㄘ θá thánㄟ ㄘ θá lànㄟ  
呼吸する (上方) 呼吸する (下方)  
「息を吸ったり吐いたりする」(II-09.7)

- (23) ㄘ phû thánㄟ ㄘ phû lànㄟ  
跳ぶ (上方) 跳ぶ (下方)  
「跳んだり跳ねたりする」(001.633)

### 2.3 「主語 + 動詞」の並列

- (24) ㄘ phài xâinㄟ ㄘ já xâinㄟ  
皮 乾く 肌 乾く  
「皮膚が乾燥する」(001.3535)

- (25) ㄘ θéin phōnㄟ ㄘ wá phōnㄟ  
木 破裂する 竹 破裂する  
「(山火事で) 木や竹が割れる」(II-11.13)

### 2.4 分離型動詞連続の並列

- (26) ㄘ lò yìㄟ ㄘ khlain báㄟ  
語る 良い 話す 正しい  
「話し方が上手だ」(016.20)

(27) ㄘ ʔán jə̀nㄟ ㄘ ʔə̀ xwèㄟ  
 食べる 十分な 飲む 満ちた  
 「食生活が満ち足りている」(I-10.19)

(28) ㄘ ʔə̀ xúㄟ ㄘ ʔə̀ xànㄟ  
 いる 団結した いる 平らな  
 「一致団結する」(001.225)

## 2.5 「主語 + 分離型動詞連続」の並列

(29) ㄘ jə̀ jā́ thî́ θíㄟ ㄘ jə̀ thán θéinkhî́ θíㄟ jàv  
 1sg 泳ぐ 水 できる 1sg 上る 木のてっぺん できる (完)  
 「私はすでに泳ぎもできるし、木のてっぺんに登ることもできる」(001.1880)

この例では、thî́ の部分と θéinkhî́ の部分の音節数が異なっている。このように、各要素が長い場合、それぞれの音節数が異なることもある。

## 2.6 副詞の並列

(30) ㄘ ʔèphliláiㄟ ㄘ ʔèchéinprànㄟ  
 清潔に 清潔に  
 「清潔に」(I-07.3)

(31) ㄘ ʔèthîㄟ ㄘ ʔèklàㄟ  
 正確に 明確に  
 「正確かつ明確に」(I-sen.70)

## 2.7 従属節の並列

(32) mənī́ chə̀phú́ lə̀ mèin nó  
 人間 民族 一 ~ 種類 (題)  
 ㄘ ʔè lə̀ pə́ láipə̀rə̀nㄟ  
 (条件) (否) 読む 新聞  
 ㄘ ʔè lə̀ jə́ láipə̀rə̀nㄟ bá́ nó ...  
 (条件) (否) 見る 新聞 (否') (題)  
 「ある民族が、新聞を読まないということであれば、(その民族は発展しているとは言えない)」(III-07.8)

## 3 動詞を含む要素の並列について

上の 2.2、2.3、2.4、2.5 に挙げたものは、いずれも動詞を含む要素の並列である。これらに従属節において否定する場合、次のように全体の前に一つだけ lə̀ を置くこともできるし、

- (33) lə- ㄘ pàkàㄘ ㄘ θàméㄘ wè bá ʔəkhúcòn ...  
 (否) 気にとめる 恐れる (強意) (否) ~なので  
 「虎が蛙を気にも留めなかったので...」(III-03.10)

次のように各要素の前に一つずつ lə- を置くこともできる。

- (34) lə- ㄘ pàkàㄘ lə- ㄘ θàméㄘ wè bá ʔəkhúcòn ...  
 (否) 気にとめる (否) 恐れる (強意) (否) ~なので  
 「虎が蛙を気にも留めなかったので...」

加藤 (1998) はこれらを動詞連続の一種と見なした。そして、lə- を各要素の前に置くことが可能ということに基づいて「並列型」の動詞連続という範疇を設定した。しかし、これらが一定の文体的意味合いを帯びている (すなわち洗練された表現である) ことを考えると、これらを動詞連続という現象の中で取り扱うべきではなく、対句表現であると考えほうが適切である。

#### 4 単独では使われない形態素を含む対句表現

対句法によって並列される要素の中には単独では使われない形態素を含むものがある。例えば次の例で、後部要素に現れた khān 「国」は単独で発話を構成することができるが、前部要素に現れた thî はこれ単独では用いることができない。

- (35) ㄘ hə- thîㄘ ㄘ hə- khānㄘ (代名詞 + 名詞句)  
 1pl ? 1pl 国  
 「私達の国」(IV-07.19)

thî は「水」という意味では使われるけれども、単独で「国」に似た概念を表すことはない。おそらく、過去のある時点で thî は「国」に似た概念を表し、かつ単独で使うことのできる名詞だったのではないか。そのような名詞が何らかの理由で元の意味を失ったものの、対句表現の中でのみ残ったのではないだろうか。このような対句表現は多かれ少なかれイデオム化していると考えられる。なぜなら、前部要素と後部要素を交換することができないからである。<sup>3</sup>

- (36) \*ㄘ hə- khānㄘ ㄘ hə- thîㄘ  
 1pl 国 1pl ?

以下に、単独では使われない形態素を含む対句表現の例を挙げる。逐語訳に「？」を付したのが単独では使われない形態素である。このような形態素を文法の中でどのように扱うべきかについては後で論じる。

- (37) ㄘ yàvònㄘ ㄘ yàcáㄘ (動詞の並列)  
 壊れる ?  
 「壊れる」(001.1383)

<sup>3</sup>thî と khān を用いたこの対句表現に対応する表現は他のカレン系言語にもしばしば観察される。例えば Sgaw Karen の pə- thî pə- kə 「私達の国」や Kayah Li の pe thā pe kə 「私達の国」(Solnit 1997:284) など。したがって、一部の対句表現はカレン祖語までさかのぼれる可能性がある。

(38) ㄷ hə- lāNㄷ ㄷ hə- klèㄷ (「代名詞 + 名詞」の並列)  
1pl 場所 1pl ?  
「私達の場所(故郷)」(IV-07.19)

(39) ㄷ pə- méㄷ ㄷ pə- θwáㄷ (「代名詞 + 名詞」の並列)  
1pl 齒 1pl ?  
「私達の齒」(001.2006)

▷ θwá はビルマ語 θwá の借用語の可能性がある。

(40) ㄷ ?ə- thìㄷ ㄷ ?ə- θòㄷ (「代名詞 + 名詞」の並列)  
3sg ? 3sg 友人  
「彼の友人」(II-10.5)

(41) ㄷ thî yāinㄷ ㄷ khāN yāinㄷ (「名詞 + 名詞」の並列)  
? 事柄 国 事柄  
「国情」(V-03.57)

(42) ㄷ dè thìㄷ ㄷ dè θòㄷ (「側置助詞 + 名詞」の並列)  
(共) ? (共) 友  
「友人と」(I-sen.21)

(43) ㄷ lò phíㄷ ㄷ thàin phíㄷ (「動詞 + 動詞助詞」の並列)  
語る (裨益) ? (裨益)  
「話してやる」(017.24)

(44) ㄷ nū yāinㄷ ㄷ nū bjàㄷ (「動詞 + 目的語」の並列)  
得る 力 得る ?  
「元気が出る」(001.1389)

(45) ㄷ mà cháiㄷ ㄷ mà nàㄷ (「動詞 + 目的語」の並列)  
作る 田 作る ?  
「稲作を行う」(001.2495)

▷ nà はシャン語などのタイ系言語からの借用である可能性がある。

(46) ㄷ jū thîㄷ ㄷ jū chàㄷ (連結型動詞連続の並列)  
見る 確かな 見る ?  
「確かめる」(001.1466)

(47) ㄷ ?ó ɛúㄷ ㄷ ?ó bàㄷ (分離型動詞連続の並列)  
いる 平和な いる ?  
「平和な」(001.225)

- (48) ㄐ ʔá mɛ̀ɪɴ ㄐ ʔá cɛ̀ɪɴ ㄐ (助数名詞句の並列)  
 多い ~ 種類 多い ?  
 「多くの種類」(III-07.12)

以下の例における θóuɴ は「肝臓」という意味である。これらの例においてこの語は「心」という意味で使われている可能性がある。しかし、対になって使われている θà「心臓」が単独でも「心」という意味で用いられるのに対して、θóuɴ は単独では「心」という意味では用いられない。このようなものも広い意味での「単独では使われない形態素」と考えることができる。

- (49) ㄐ ʔə θóuɴ ㄐ ʔə θà ㄐ (「代名詞 + 名詞」の並列)  
 3sg 肝臓? 3sg 心  
 「彼の心」(I-04.10)

- (50) ㄐ θóuɴ máu ㄐ ㄐ θà lə̀ɴ ㄐ  
 肝臓? 快適な 心 暖かい (「主語 + 動詞」の並列)  
 「嬉しい」(016.7)

▷ 全体として「嬉しい」ことを表すイディオム。

- (51) ㄐ dòn θóuɴ ㄐ dòn θà ㄐ (「動詞 + 目的語」の並列)  
 真似る 肝臓? 真似る 心  
 「同情する」(017.16)

▷ 全体として「同情する」ことを表すイディオム。

下の例では、前部要素が θóuɴ を含み、後部要素も単独で用いられることのない形態素 thó を含んでいる。

- (52) ㄐ θóuɴ ʔwí ㄐ ㄐ θà thó ㄐ  
 肝臓? 楽しい 心 ? (「主語 + 動詞」の並列)  
 「嬉しい」(017.9)

▷ 全体として「嬉しい」ことを表すイディオム。

## 5 対応する二音節語との関係について

対句表現には、対応する二音節語が見出されることがある。すなわち、対句表現を  $C A_1 A_2 \dots A_n \supset C B_1 B_2 \dots B_n \supset$  ( $A_n$  と  $B_n$  はそれぞれ前部要素と後部要素に含まれる任意の音節。数字は最初の音節から数えた順番) と表すと、別個に  $A_i B_i$  (つまり二つの音節  $A_i$  と  $B_i$  は対句表現の各要素における順番が同じである) という構成を持つ二音節語が存在する場合がある。

対応する二音節語を持つ対句表現の例を下に挙げる。対応する二音節語を「cf.」の後に示す。

- (53) ㄘ jə- phóㄘ ㄘ jə- lìㄘ (=9) cf. phólì 「子と孫; 子孫」  
 1sg 子 1sg 孫  
 「私の子と孫」(015.26)
- (54) ㄘ mà cháíㄘ ㄘ mà klòㄘ (=17) cf. cháíklò 「水田」  
 作る 田 作る 沖積地の農地  
 「稲作を営んでいる」(I-10.19)
- (55) ㄘ θéin phōNㄘ ㄘ wá phōNㄘ (=25) cf. θéinwá 「木と竹」  
 木 破裂する 竹 破裂する  
 「(山火事で) 木や竹が割れる」(II-11.13)
- (56) ㄘ ?án jènㄘ ㄘ ?ò xwèㄘ (=27) cf. jènxwè 「満ち足りた」  
 食べる 十分な 飲む 満ちた  
 「食生活が満ち足りている」(I-10.19)
- (57) ㄘ ?ó xúㄘ ㄘ ?ó xànㄘ (=28) cf. xúxàn 「団結した; 平らな」  
 いる 団結した いる 平らな  
 「一致団結する」(001.225)
- (58) ㄘ ?èthìㄘ ㄘ ?èklàㄘ (=31) cf. thìklà 「明確な」  
 正確に 明確に  
 「きちんと」(I-sen.70)

以下の諸例は、一方の要素に単独では用いられない形態素を含む。

- (59) ㄘ hə- lāNㄘ ㄘ hə- klèㄘ (=38) cf. lānklè 「場所」  
 1pl 場所 1pl ?  
 「私達の場所(故郷)」(IV-07.19)
- (60) ㄘ ?ə- thìㄘ ㄘ ?ə- θòㄘ (=40) cf. thìθò 「友人」  
 3sg ? 3sg 友人  
 「彼の友人」(II-10.5)
- (61) ㄘ thî yāinㄘ ㄘ khāN yāinㄘ (=41) cf. thîkhāN 「国」  
 ? 事柄 国 事柄  
 「国情」(V-03.57)
- (62) ㄘ lò phíㄘ ㄘ thàin phíㄘ (=43) cf. lòthàin 「話す」  
 語る (裨益) ? (裨益)  
 「話してやる」(017.24)
- (63) ㄘ nū yāinㄘ ㄘ nū bjàㄘ (=44) cf. yāinbjà 「力」  
 得る 力 得る ?  
 「元気が出る」(001.1389)

(64) ㄐ jū thîㄓ ㄐ jū chàㄓ (=46) cf. thíchà 「確実な」  
 見る 確かな 見る ?  
 「確かめる」(001.1466)

(65) ㄐ ʔə- θóuNㄓ ㄐ ʔə- θàㄓ (=49) cf. θóuNθà 「心」  
 3sg 肝臓? 3sg 心  
 「彼の心」(I-04.10)

(66) ㄐ θóuN yìㄓ ㄐ θà ʔwàㄓ cf. θóuNθà 「心」; yìʔwà 「清らかな」  
 肝臓? 良い 心 白い  
 「心が清らかな」(I-04.10)

このような対句表現は、対応する二音節語を分解することによって作られると考えることはできるだろうか<sup>4</sup>。このように考えることには以下に示す二つの利点があるように見える。

第一は配列順序の問題である。対句法における配列順序は、最初に述べたとおり、基本的には自由である。例えば、

(67) ㄐ ləthàiNㄓ ㄐ kàNkàㄓ  
 話す 噂する  
 「お喋りする」(II-02.14)

は、順序を逆にして次のようにしてもよい。

(68) ㄐ kàNkàㄓ ㄐ ləthàiNㄓ  
 噂する 話す  
 「お喋りする」(001.1708)

ところが、順序が自由ではない場合がある。例えば次の例は前部要素と後部要素を逆にすることができない。

(69) ㄐ ʔə- mōㄓ ㄐ ʔə- phāㄓ  
 3sg 母 3sg 父  
 「彼の母と父」(IV-01.11)

(70) \* ㄐ ʔə- phāㄓ ㄐ ʔə- mōㄓ  
 3sg 父 3sg 母

この原因の一つとして考えられるのは、mōphā「両親」という二音節語の存在である。筆者が知り得る限りでは、対応する二音節語が存在する場合、その二音節語に対応する順序で要素を並べなければならない。このことを説明するためには、二音節語を分解して対句表現を作ったと考えると便利に見える。

第二は、単独では使われない形態素を含む対句表現の問題である。

<sup>4</sup>Matisoff はラフ語(Lahu)の複合語の「分解」の記述に際して‘compound ionization’という言葉を用いている(1973: 82)。「ionization」(イオン化)というのは趙元任や李方桂が用い始めた中国語学の用語である。複合語が分割されてそれぞれの形態素が別個の単語のように振る舞う現象を、化学のイオン化になぞらえてこう呼んだという(Chao 1968: 159-160 参照)。

- (71) C hə- thî ⊃ C hə- khāN ⊃ (=35)  
 1pl ? 1pl 国  
 「私達の国」(IV-07.19)

この対句表現には、対応する thîkhāN 「国」という二音節名詞がある。この二音節語を分解して hə- thî hə- khāN という対句表現が作られたと考えれば、意味を持たない要素 thî の由来が説明しやすくなるように見える。

二音節語を分解して対句表現を作るという操作を仮定することにはこのような利点がある。しかしこの考え方には無理がある。その理由は、単独では使われない形態素を含む対句表現の中には、対応する二音節語を持たない場合があるということである。例えば次の例を見ていただきたい。

- (72) C ?ó ɛú ⊃ C ?ó bà ⊃ (=47)  
 いる 平和な いる ?  
 「平和な」(001.225)

- (73) C θáwɪN ?wí ⊃ C θà thó ⊃ (=52)  
 肝臓? 楽しい 心 ?  
 「嬉しい」(017.9)

- (74) C pə- mé ⊃ C pə- θwá ⊃ (=39)  
 1pl 歯 1pl ?  
 「私達の歯」(001.2006)

- (75) C mà cháí ⊃ C mà nà ⊃ (=45)  
 作る 田 作る ?  
 「稲作を行う」(001.2495)

- (76) C ?á mèiN ⊃ C ?á cèiN ⊃ (=48)  
 多い ~種類 多い ?  
 「多くの種類」(III-07.12)

(72) の下線部に対応する動詞 \*ɛúbà、(73) の下線部に対応する動詞 \*?wíthó、(74) の下線部に対応する名詞 \*méθwá、(75) の下線部に対応する名詞 \*cháínà、(76) の下線部に対応する助数名詞 \*mèiNcèiN は存在しない。したがって、二音節語の分解という操作を設定したとしても、これらの対句表現に関しては、現実には存在しない二音節語の存在を仮定しなければならなくなる。

したがって、本稿では、二音節語を分解して対句表現を作るという操作を認めない。それでは上で見た二つの問題、すなわち、配列順序が替えられないという問題、および、単独では使われない形態素の由来をどう説明するかという問題は、どのように解決したら良いだろうか。

配列順序の問題については、対句表現を作るとき、もし対応する二音節語があるならば、それを参照して配列順序が決定されるのだと考えれば良い。



対句法が単音節性と関連のある現象であるのかどうかについては、様々なタイプの言語の同様の現象を対照した上で慎重に議論する必要があるだろう<sup>6</sup>。

ところで、対句表現には上で述べたように、単独で用いることのできない形態素を含むものがある。これらはおそらく元々は単独で現れることのできる単語だったのではないかと考えられる<sup>7</sup>。つまりこれらの単語は、宮岡(2002)の言葉を借りれば、意味が「希薄化」(dilution)したのである。宮岡は意味の希薄化に関連して、次のような興味深いスケールを描いている。

polysynthesis ← 統合度 → analysis → dilution

宮岡(2002: 142)の図を簡略化

語の統合度の一方の極に、一語に多くの形態素を含む複統合性(polysynthesis)を置き、もう一方の極に、一語に一つの形態素しか含まない分析性(analysis)を置くならば、希薄化(dilution)は、分析性のさらに右に位置付けることができると宮岡は言う。複統合性は一語の中に多くの情報を含み得る。これとは逆に、希薄化した語を含む表現は語数の多さに比して情報の量が少ない。ポー・カレン語における希薄化した語を含む対句表現も、まさに宮岡の示したスケールの右端近くに置かれるべき特徴を示している。例えば hə- thī hə- khān 「私達の国」は、hə- khān だけでも指示できる対象を、倍の数の音節を使って指示している。

宮岡(2002: 136)は、希薄化に関して、中国語や英語のような「単音節的傾向がつよく分析的で、語順が固定的になりやすい言語に多くみられる傾向なのかどうか、これは検討に値する問題であろう」と述べている<sup>8</sup>。希薄化の傾向を呈しやすいであろうと宮岡が推測する言語タイプを、東南アジア大陸部諸言語の見地から検証すると、「単音節的傾向」という指摘は当たっているとと言える。しかし、語順が固定的になりやすい分析的言語すなわち「孤立語的」という指摘は、必ずしも当てはまらない。なぜなら、ビルマ語やラフ語のような多分に膠着語的な特徴を持つSOV型言語にも同様の希薄化が豊富に見られるからである。ビルマ語の例を下に挙げておく。この例の tá は少なくとも現代語では「覚える」という意味を表さない。

(81) hma? ta? tá da? tè (Burmese)  
覚える できる ? できる REALIS  
「覚えることができる」

いずれにせよ、対句法は言語の類型を考える上で興味深い現象の一つであると考えられる。まずは東南アジア大陸部諸言語の対句法の起源を探るため、この地域で話されている様々な系統の言語の対句法を比較検討していく必要があるだろう。

<sup>6</sup>クメール語の随伴語についての議論の中で坂本(1988: 1489)は、単音節性のみからは随伴語の起源を説明できないということを示唆している。

<sup>7</sup>Matisoff(1973: 82)もラフ語の elaborate expression における化石化した要素(fossil-elements)が元来は‘active morpheme’であっただろうと言っている。よって elaborate expression は「歴史言語学者にとっての豊富な情報源」(a rich source of information for the historical linguist)であると述べている。

<sup>8</sup>宮岡(2002)は、Don't try to come it!(偉そうにするんじゃない)などにおける虚辞的な it の頻繁な使用や、put up with や come upon などの「多語一語的」複合体とも言うべきイディオムの豊富さが、英語の希薄化傾向の強さを示すと述べている。

## 略号一覧

1sg 一人称単数代名詞; 1pl 一人称複数代名詞; 2sg 二人称単数代名詞; 2pl 二人称複数代名詞; 3sg 三人称単数代名詞; 3pl 三人称複数代名詞; (下方) 下に向かう動作を表す làN に付す; (完) 完了を表す助詞 jàu に付す; (強意) 強意を表す助詞 wê に付す; (共) 共同を表す側置助詞 dè に付す; (継起) 継起を表す従属節助詞 yòN に付す; (使役) 使役を表す動詞助詞 dàu に付す; (条件) 条件や仮定を表す節を作る助詞 ?è に付す; (上方) 上に向かう動作を表す thán に付す; (題) 主題を表す助詞 nó などに付す; (当為) 当為を表す動詞助詞 bá に付す; (場) 場所を表す側置助詞 lé などに付す; (否) 否定を表す助詞 lə- あるいは ?é に付す; (否') 否定を表す助詞 lə- と共に現れる助詞 bá に付す; (裨益) 裨益を表す動詞助詞 phí に付す; (毎) 「すべての～」を表す kò に付す; (毎') kò と共に現れる形式 dè に付す

## 参考文献

- Chao, Yuen Ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Ebata, Fuyuki. 2003. "Paired words in Yakut (Sakha)." *Turkic Languages* 7:257-267.
- Haas, Mary R. 1964. *Thai-English Student's Dictionary*. Stanford: Stanford University Press.
- Henderson, Eugenie J. A. 1997. *Bwe Karen Dictionary, with Texts and English-Karen Word List, 2 Vol.* London: School of Oriental and African Studies, University of London.
- 加藤昌彦 (Kato, Atsuhiko) 1998 「ポー・カレン語 (東部方言) の動詞連続における主動詞について」『言語研究』113:31-61.
- . 2003. "Pwo Karen." *The Sino-Tibetan Languages* (Graham Thurgood and Randy LaPolla, eds.), pp.632-648. London and New York: Routledge.
- . 未公刊 「ポー・カレン語文法」 pp.603.
- Matisoff, James A. 1973. *The Grammar of Lahu*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 宮岡伯人 2002 『「語」とはなにか——エスキモー語から日本語をみる』東京:三省堂。
- Nguyen-Dinh-Hoa. 1965. "Parallel constructions in Vietnamese." *Lingua* 15:125-139.
- 坂本恭章 1988 「クメール語」『言語学大辞典』1:1479-1505, 東京:三省堂。
- Solnit, David. 1997. *Eastern Kayah Li, Grammar, Texts, Glossary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.